様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０２５８８

研究課題名（和文）プルーストの「庭園美学」

研究課題名（英文）Aesthetic of Garden in Proust

研究代表者
津森　圭一（Tsumori, Keiichi）

新潟大学・人文社会科学系・准教授

研究者番号：７０７２２９０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：文学作品で描かれる「庭園」は複合的な意味を担っている。本研究は、マルセル・プルーストの作品で描かれる庭園の諸相を明らかにし，そのうえで、それらの庭園の描写が，作家の小説美学といかに結びつき，ひとつの「庭園美学」を形成しているかを解明するものである。とくに，フランスの整形式庭園とイギリス風景式庭園との関係を踏まえて庭園描写を読解することで明らかになる「閉ざされた庭」と「開かれた庭」の対照関係は，単なる風景描写の問題を超えて、各人物の立場や人物間の関係を立体的に描き出す手法に結実している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現代社会において，経済活動とは切り離された場とみなされがちな「庭園」が，人間にとっていかに必要不可欠な空間であるかを示すこと，それが，文学作品を精緻に読むことによって認識できることを示すことに本研究の意義はあると考えられる。

研究成果の概要（英文）："Gardens" depicted in literary works has a complex meaning. This study aims to clarify various aspects of the gardens depicted in Marcel Proust's work, and to elucidate how the depictions of those gardens are linked to the writer's novel aesthetics to form a "garden aesthetic". In particular, the contrasting relationship between "closed garden" and "open garden", which is clarified by reading the garden description referring to the relationship between the French formal garden and the English landscape garden, is not just a simple question of landscape description. It has resulted in a method of depicting the position of each person and the relationship between them.

研究分野：ヨーロッパ文学

キーワード：マルセル・プルースト　庭園　フランス文学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本課題の研究期間に先立つ 2015 年度・2016 年度に，マルセル・プルースト（1871-1922）における庭園描写に関連して 2 篇の論考（「プルーストの庭園論――庭園の詩学と小説の美学のあいだで」,『*STELLA*』，九州大学フランス語フランス文学研究会，34 号，2015 年 12 月，pp. 189-207；「プルーストの庭園美学――「閉ざされた庭」と「開かれた庭」のあいだで」『*STELLA*』九州大学フランス語フランス文学会，35 号，2017 年 1 月，pp. 119-135.）を刊行した。2017 年度から 2021 年度にわたり，この 2 篇の論考の成果を発展させる方向で研究を進めた。

プルーストと「庭園」に関わる主な先行研究としては，作品中で描写される庭園描写の全体像を示したポリーヌ・ニューマン＝ゴードン Pauline Newman-Gordon の« L'Image du jardin chez Proust »（*Stanford French Review*, 1977），コンブレーの庭の描写のモデルが，ウール＝エ＝ロワール県にある父の実家の所在地イリエよりもむしろパリ 16 区のオートゥイユにある母方の叔父の別荘にあることを立証したドニーズ・メイエール Denise Mayer の« Le Jardin de Marcel Proust »,（*Études proustiennes*, nº 5, 1984），「コンブレー」における庭の描写を含む散歩の場面が生成される過程を解明したクロディーヌ・ケマール Claudine Quémar の« Sur deux versions anciennes des " côtés " de Combray »（*Études proustiennes II*, nº 2, 1975）および和田章男の *Création romanesque de Proust : la genèse de "Combray"*（Honoré Champion, 2012）等がある。

以上の先行研究を参考に，プルーストの作品における庭園描写を，西欧の庭園文化史を踏まえたうえで，「庭園美学」として論じることを試みる余地はある。そこで，歴史的・文化的文脈のなかでプルーストの庭園描写が執筆された経緯とその美学上の意図と役割を明らかにすることを目的に，本研究を開始した。

２．研究の目的

プルースト研究においては，絵画，音楽，建築等のテーマに着目した，ジャンル横断的な研究が盛んである。本研究も，文学を庭園芸術という異なるジャンルを結びつけることを意図したものである。庭園芸術は，本来的に，植物や鉱物，水などの「物」を素材とし，景観を改良して風景美を表現する芸術ジャンルとみなされる。「物」ではなく言葉を伝達手段とする文学において，庭園はいかに表現され，創出されていったか，そのメカニズムと意義を明らかにするのが本研究の目的であった。

具体的には，マルセル・プルーストが小説中で展開する個別の庭園描写の形成過程を明らかにしたうえで，作家にとっての庭園がいかなる美学を担っているのかを提示することを目指した。その際，西欧の庭園文化史，とりわけフランス式庭園およびイギリス式庭園をめぐる 17 世紀以降の理論的言説および先行する作家や詩人による庭園描写の影響を見定めることを重視した。

３．研究の方法

語源的に「囲われた場所」を示す「庭園」（*jardin*）は，キリスト教の象徴主義で自然が解釈されていた中世には観念的な場とみなされ，庭園の図像的表象においても，その構成要素である樹木，花，動物等はすべて寓意的な役割を担っていた。17 世紀のフランスでは，ヴォー＝ル＝ヴィコントやヴェルサイユの庭園に代表される，ル・ノートルによる幾何学的なプランから成る「整形式庭園」が流行し，ヨーロッパ全域に広がったが，18 世紀にはウィリアム・ケント（1685-

1748）やランスロット・ブラウン（1716-1783）などがイギリスで非整形的で自然風の「風景式庭園」を築造したことで，西洋の庭園概念は大きく塗り替えられた。

プルーストの描く個々の庭園描写が，これらの様式といかに関連するものであるかを理解するために，各時代の庭園理論家（クロード・モレ（1580 頃-1649），デザリエ＝ダルジャンヴィル（1680-1765），アディソン（1672-1719），ポウプ（1688-1744），ウォルポール（1717-1797），ヴァトレ（1718-1786），ジラルダン（1735-1808），ラウドン（1783-1843），ロビンソン（1838-1935）等）の著作を参照した。また，文学作品（ホメロス，ウェルギリウス（B.C.70-B.C.19），ルソー（1712-1778），バルザック（1799-1850），ゾラ（1840-1902）等）における庭園描写の伝統をプルーストがいかに引き継いでいるかについても確認する必要があった。

『失われた時を求めて』（1913-1927）第 1 篇『スワン家のほうへ』（1913）第 1 章「コンブレー」で描写されるレオニー叔母の家の庭園と，スワン家の庭園とが対照的に描かれている。この点は，フランス発祥の「整形式庭園」とイギリス発祥の「風景式庭園」との違いと関連付けて説明できるが，庭園文化史および文学史に即した検証の必要がある。そこで，プルーストにおいて，両者の庭園がいかにして成立したかを，以下の方法で明らかにすることを目指した。

①『ジャン・サントゥイユ』（1895-1899 執筆，1951 刊行）で描かれるイリエおよび『失われた時を求めて』におけるコンブレーの庭園の執筆過程を，既存の草稿研究を参照しながら確認する。

②各段階における庭園描写を，先に調査した庭園理論書の論点，先行する文学作品における庭園描写と照合する。

③プルーストの描く庭園のプランや各要素が，最終的に物語の進行のうえでいかなる役割を負っているかを考察し，その結果をプルーストの「庭園美学」として提示する。

具体的には，以下のような視点から，「庭園美学」を解明することを試みた。

（1）隠遁の場

西欧の「庭園」は，中世以来，周囲を壁によって〈閉ざされた〉空間であり，例えば修道院の中庭は，修道士の「観想的生活」の場として機能してきた。『失われた時を求めて』の主人公の少年は，しばしば「庭園」で孤独に身を置き読書にいそしむが，そこにはこのような伝統が示唆されていると考えられる。「庭での読書」は，草稿においても推敲を重ねられた箇所であるが，これを，修道院での「隠遁生活」の伝統との関連で考察する必要があった。

（2）〈閉ざされた庭〉と〈開かれた庭〉

イギリスでは 17 世紀後半より〈閉ざされた庭〉が，公共善への配慮の欠如と特徴付けられた。この状況を打開するため，18 世紀イギリスの庭園理論家は，自然へと〈開かれた庭〉の創造を提唱した（安西信一『イギリス風景式庭園の美学――「開かれた庭」のパラドックス』東京大学出版会，2000 年）。プルーストが描く「庭園」も，壁などによって外界から〈閉ざされた〉場合と，外界の眺望に向かって〈開かれた〉場合とでは，本質的に異なる空間を構成していると考えられる。その違いは，庭の所有者の社会的地位や趣味，性格にも対応する。この点を検証するうえで，『失われた時を求めて』第 3 編『ゲルマントの方』（1920-1921）のパリ郊外の〈閉ざされた庭〉および第 4 篇『ソドムとゴモラ』（1921-1922）のラ・ラスプリエール荘における周囲の景観に対して〈開かれた庭〉が分析対象となった。

（3）人工と自然

「コンブレー」では，「自然」を模倣することで創造された「庭園」の「偽＝自然」が，次第に自律性を獲得し，ついには人間の影響から解放されると記述されている。この考えは，18 世

紀における，英国の風景式庭園をめぐる理論と無関係ではない。しかし，プルーストのテクストには，この影響を論証するための手がかりはない。そこで，プルーストが直接影響を受けた，19 世紀以降の作家の庭園や，同時代の文献，知人からの証言を精査することで，プルーストと 18 世紀の庭園論を結びつける間接的な影響を見定める必要があった。

４．研究成果

本研究の成果は「5. 主な発表論文等」の通りであるが，その中枢となる 4 つのポイントについて，以下に概要を記す。

（1）マグダラのマリアをめぐって

ジョン・ラスキン（1819-1900）が庭園を寓意的に扱った『胡麻と百合』（1864，プルーストによる翻訳は 1906 年刊行）の第 2 部「百合――王妃の庭園について」に着目し，このテクストと，プルーストが『ゲルマントの方』で描写するパリ郊外の「庭園」との関連について考察した。その結果，以下のような解釈に至った。プルーストにとって，社交や情念から自らを隔離し，「読書」に打ち込むための隠遁の場，あるいは瞑想の場として描かれる傾向がある。この場面における庭園の壁は，ユダヤ人女優ラシェルへの情愛に夢中となったサン＝ルー（主人公「私」の友人）と，庭園の梨の花に見とれる語り手との間の心理的な壁の寓意になっている。また，ラスキンが「王妃の庭園について」で言及するマグダラのマリアには，かつて娼婦であったラシェルが重ね合わされている。ラシェルの存在があってこそ，マグダラのマリアが喚起され，その罪は，天使にたとえられる梨の木の花々によって贖われているのである。（« Jardins et paysages ruskiniens chez Marcel Proust », *LITTERA. Revue de Langue et Littérature Française*, nº 5, 2020, pp. 49-60.）

（2）ラスキンの庭園観との関連

プルーストの庭園への関心は，1907 年に作家が「フィガロ」紙に寄稿したアンナ・ド・ノアイユ（1876-1933）の詩集『眩暈』（1907）の書評で表明されている。詩に描かれる庭園には詩人の精神が投影されていると考えるプルーストは，この書評でジョン・ラスキンが晩年に湖水地方のコニストン湖畔にある地所ブラントウッドに造営した庭園に言及する。19 世紀の英国では，ジョン・クローディアス・ラウドンが整形庭園の再評価を行ったが，世紀後半になるとウィリアム・ロビンソンが「野性的な庭園」への回帰が提唱された。ロビンソンを評価していたラスキンは，ブラントウッドにできる限り野生に近い庭園を実現しようと努める。そもそもラスキンは異国の植物が導入された人工的な庭園や温室を批判し，庭園にはもっぱら土地の風土に適応した植物が植えられるべきであると主張していた。いっぽう，庭園は本来，自然に似せて作られた人工の産物である。ラスキンは人工性を排した，いわば「反＝庭園」のような純粋に自然な空間の創造を目指していたのであるが，ブラントウッドの庭は，植物学上の知識や神話や絵画・文学への暗示で満たされた空間であり，プルーストはそのことを認識していた。つまり，ラスキンの庭園は，植物をありのままの自然の状態で観察する場ではなく，植物を自然から切り離し「膨大な調書」として静的に眺める場であった。そこにプルーストは，個々の植物の分析が，いつしか従来の文学作品や芸術作品の礼賛や批評に成り代わるという「偶像崇拝」を認めていたのである。（「ラスキンの庭園美学とプルーストの植物学的詩学」『*STELLA*』九州大学フランス語フランス文学研究会，40 号，2021 年 12 月，47-66 頁）

（3）シャルリュス男爵の庭園愛好

『失われた時を求めて』第 7 篇『見出された時』（1927）で，主人公はシャンゼリゼ公園で，脳卒中から回復途上の老いたシャルリュス男爵が，愛人ジュピアンに介護されているのに出会う。語り手はその様子を「公園の河川像の髯に，雪が降り積もったかのごとく，白い髯が，顎から流れ落ちていた」と描写する。かつて，スワン氏の庭で，「顔から飛びださんばかりの眼で，［主人公］を見詰めていた」（第 1 篇『スワン家のほうへ』）人物が，今や「公園の河川の神」の彫像となって，老いさらばえた姿をさらしているのは象徴的である。読者は，庭でこの人物に初めて遭遇し，また庭でその姿を，見届ける。つまり，シャルリュス男爵にとって，庭とは，絵画や建築とならぶ芸術性を備えた場であるのはもちろんのこと，通常は何としても隠したいと考える性的嗜好が，解放される場でもあったのである。かつ，そうした庭は，生垣や壁のような囲いに区切られ，一見すると外界から遮断された閉じた空間として立ち現われる。しかし，その囲いには隙間があり，そこから視線や情報が貫通してしまう場でもあった。このようにシャルリュス男爵は，庭園の諸相を体現する人物である。（「『失われた時を求めて』の登場人物の庭園愛好」日本フランス語フランス文学会関東支部大会シンポジウムでの口頭発表，2022 年 3 月 5 日）

（4）閉じ，かつ開いた場としての庭園

『スワン家のほうへ』第 1 章「コンブレー」で，主人公は庭園の外から，庭園内にいる「赤みがかったブロンド髪の少女」を目にする。それからしばらく，ふたりは見つめ合う。この庭園と外部との境は生垣である。つまりこの庭園は，一見すると閉鎖的空間である。しかし実際には境界の一部を成す生垣には隙間があり，主人公はその隙間を通して庭園の内部にいる少女が見えている。つまり，この庭園は，外の風景との一体化をめざしたイギリス式風景庭園のような「開かれた」空間と等価である。庭園の内外を貫通する視線が成立するからこそ，登場人物たちの出会いが実現しているのである。また，ヴェルデュラン夫妻が，同地の庭園から見える「風景」を「小派閥」の専有物にしようとする態度（第 4 篇『ソドムとゴモラ』）は，ルネ＝ルイ・ド・ジラルダンの『風景の構成について』（1777）の「土地の背景を，美しい眺望によって我が物とすることは，一種の所有である」という一節を想起させる。ヴェルデュラン夫妻が土地の人間でないにもかかわらず，風景の魅力を来客に示すことに躍起となる様を戯画的に描くために，プルーストは，風景式庭園という，視線を否応なく外へと向かわせる「装置」を効果的に導入したのではないか。作家マルセル・プルーストが小説に描き出した庭園は，以上のように各々の場面で不可欠な役割を負っている。アンドレ・ル・ノートル（1613-1700）がデザインしたヴェルサイユ宮殿の庭園に代表される整形式庭園は，一個の完結した世界を象徴しているがゆえに，外界に対して「閉じて」いる。いっぽう，18 世紀のイギリスで造られたランスロット・ブラウン等による風景式庭園は外部の自然に向かって「開かれて」いる。「閉ざされた庭」は伝統の墨守や保守性に，「開かれた庭」は自然への愛好，外界への関心，階級からの逸脱に結びついている。フランスの整形式庭園とイギリス風景式庭園との関係に着目することで明らかになる「閉ざされた庭」と「開かれた庭」の対照は，単なる風景描写の問題を超えて，各人物の立場や人物間の関係を立体的に描き出す手法に結実し，小説美学の一端を担っている。（« Jardins et paysages ruskiniens chez Marcel Proust », *LITTERA. Revue de Langue et Littérature Française*, nº 5, 2020, pp. 49-60.および 2022 年 6 月時点で未発表の著書）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 Keiichi TSUMORI	４．巻 6
２．論文標題 Marcel Proust, A la recherche du temps perdu, traduit en japonais par Kazuyoshi Yoshikawa	５．発行年 2021年
３．雑誌名 LITTERA	６．最初と最後の頁 147-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/littera.6.0_147	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Keiichi Tsumori	４．巻 5
２．論文標題 Jardins et paysages ruskiniens chez Marcel Proust	５．発行年 2020年
３．雑誌名 LITTERA	６．最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20634/littera.5.0_49	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Keiichi Tsumori	４．巻 -
２．論文標題 Reflexions sur la lecon d'architecture d'Elstir	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Proust et l'acte critique	６．最初と最後の頁 245-258
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 津森圭一	４．巻 38
２．論文標題 プルーストとナビ派の画家たち	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ステラ	６．最初と最後の頁 37-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/2556272	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 津森圭一	4．巻 -
2．論文標題 プルーストと建築―反修復論から近代建築の美の発見へ―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 Correspondances 北村卓教授・岩根久教授・和田章男教授退職記念論文集	6．最初と最後の頁 425-436
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 津森圭一	4．巻 -
2．論文標題 「大聖堂の死」を前にしたプルースト	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際シンポジウム成果報告論文集　証言の時代とそれ以前	6．最初と最後の頁 23-30頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 津森圭一	4．巻 36
2．論文標題 プルースト初期作品における風景　ボードレール「芸術家の告白の祈り」との関連で	5．発行年 2017年
3．雑誌名 STELLA	6．最初と最後の頁 119-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/1906130	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 津森圭一	4．巻 29(4)
2．論文標題 プルースト『失われた時を求めて』にみる風景美学	5．発行年 2018年
3．雑誌名 立命館言語文化研究	6．最初と最後の頁 185-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00003123	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 津森圭一	4．巻 40
2．論文標題 ラスキンの庭園美学とプルーストの植物学的詩学	5．発行年 2021年
3．雑誌名 STELLA	6．最初と最後の頁 47-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4752561	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 津森圭一	4．巻 45
2．論文標題 Yasue Kato, L'Evolution de l'univers floral chez Proust. De La Bible d'Amiens a La Recherche du temps perdu （Paris, H. Champion, coll. "Recherches proustiennes", 2019.）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本フランス語フランス文学会中部支部研究論文集	6．最初と最後の頁 43-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24522/basllfc.45.0_143	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 Keiichi Tsumori
2．発表標題 Proust, Ruskin et l'art du jardin et du paysage
3．学会等名 Ruskin et la France, Universite de Nagoya（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Keiichi Tsumori
2．発表標題 Proust et les Nabis
3．学会等名 Proust et l'esthetique de la reception, Universite d'Osaka（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 津森圭一
２．発表標題 「大聖堂の死」を前にしたプルースト
３．学会等名 国際シンポジウム「証言の時代とそれ以前―フランスと日本の事例から―（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 津森圭一
２．発表標題 ワークショップ「近代フランス美術と文学―その照応と対立のダイナミズム」「ピエール・ボナールとマルセル・プルースト」
３．学会等名 日本フランス語フランス文学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 津森圭一
２．発表標題 プルーストの〈風景〉 ― 象徴主義との関連で
３．学会等名 シンポジウム「象徴主義と＜風景＞―ボードレールからプルーストまで―」
４．発表年 2017年

１．発表者名 津森圭一
２．発表標題 『失われた時を求めて』の登場人物の庭園愛好
３．学会等名 日本フランス語フランス文学会関東支部大会シンポジウム
４．発表年 2022年

〔図書〕　計4件

1．著者名 マルセル・プルースト、吉川一義訳、津森圭一索引編集	4．発行年 2019年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 344頁＋247頁（逆丁），うち1-259頁（逆丁）を担当
3．書名 『失われた時を求めて』第14巻『見出された時II』	

1．著者名 坂巻康司・立花史・津森圭一・廣田大地（編著）	4．発行年 2018年
2．出版社 水声社	5．総ページ数 392頁，うち338-362頁を担当
3．書名 象徴主義と〈風景〉　ボードレールからプルーストまで	

1．著者名 イザベル・カーンほか	4．発行年 2018年
2．出版社 国立新美術館、日本経済新聞社	5．総ページ数 264頁，うち72-73頁を担当
3．書名 『ピエール・ボナール展図録　オルセー美術館特別企画　2018年9月26日-12月17日』	

1．著者名 永井敦子，黒岩卓，畠山達	4．発行年 2021年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 250頁，うち86-89頁，193-196頁を担当
3．書名 フランス文学の楽しみかた　ウェルギリウスからル・クレジオまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関